教師の力量形成に関する調査研究（V-3）
―第5回目（2004）調査結果の基礎分析報告：教職意識の構造―

A Research on Professional Development
of Teachers in Primary and Secondary Schools（V-3）

山　﨑　準　二
Junji YAMAZAKI

（平成18年9月30日受理）

0．はじめに

本報告は、静岡大学教育学部卒業生で静岡県下の主に小・中学校に勤務する教師を、《図表1》に記されたような卒業コーホート（GC：Graduate Cohort と呼称）を編成し、彼らの「教師としての力量形成」に関する諸事項を自記式質問紙法（郵送法）によって把握することを目的として実施してきている継続調査の第5回目（2004年8月に実施）調査結果の基礎分析報告の一部である。今回の報告は、先に同タイトルで報告した2つのもの（注1）の続きを成すものであり、特に教師における教職意識の構造について焦点を当てて報告する。また本報告は、あくまで第5回目調査結果の報告を基本としているが、必要に応じて過去の調査データとの比較分析（コーホート分析）を行い、また現時点における20歳代の若い教師層である第10 GC、第11 GC の傾向や特徴にも言及していくことにする。

《図表1》アンケート調査対象者の構成

呼称	項目 卒業年月	【第5回調査】（2004年8月） 回答者数：（性別構成比） 男性	女性	合計 実数（回収率）	【第4回調査】（1999年8月） 合計 実数（回収率）	【第3回調査】（1994年8月） 合計 実数（回収率）	【第2回調査】（1989年8月） 合計 実数（回収率）	【第1回調査】（1984年8月） 合計 実数（回収率）
第1GC	1952.3-54.3	――	――	――	――	205 (65.5%)	194 (60.7%)	265 (77.7%)
第2GC	1957.3-59.3	――	――	――	209 (65.1%)	212 (66.7%)	189 (56.6%)	275 (80.9%)
第3GC	1962.3-64.3	114 (63.3%)	64 (35.6%)	180 (57.9%)	188 (58.6%)	221 (68.6%)	203 (62.1%)	253 (76.0%)
第4GC	1967.3-69.3	92 (60.1%)	60 (39.2%)	153 (54.1%)	131 (45.6%)	161 (55.5%)	162 (55.5%)	214 (67.9%)
第5GC	1972.3-74.3	65 (48.9%)	68 (51.1%)	133 (50.2%)	125 (47.2%)	148 (56.3%)	136 (51.9%)	172 (63.8%)
第6GC	1977.3-79.3	54 (38.6%)	85 (60.7%)	140 (46.5%)	139 (43.7%)	150 (49.5%)	145 (45.0%)	153 (51.2%)
第7GC	1983.3 のみ	39 (38.6%)	56 (58.3%)	96 (36.9%)	107 (41.5%)	119 (45.1%)	115 (41.7%)	173 (59.2%)
第8GC	1988.3のみ	36 (50.7%)	35 (49.3%)	71 (41.5%)	64 (34.8%)	85 (45.7%)	109 (55.6%)	――
第9GC	1992.3-93.3	31 (41.3%)	44 (58.7%)	75 (39.9%)	78 (35.6%)	136 (57.9%)	――	――
第10GC	1997.3-99.3	22 (34.4%)	42 (65.6%)	64 (37.9%)	91 (46.7%)	――	――	――
第11GC	2002.3-04.3	31 (37.8%)	48 (58.5%)	82 (42.3%)	――	――	――	――
総計		484 (48.7%)	502 (50.5%)	994 (46.4%)	1132 (47.8%)	1437 (57.6%)	1253 (53.8%)	1505 (63.1%)

※合計欄の（回収率）は、対象者死亡や宛先不明で返送されてきたものを除き、実配布数に対する有効回答者数の割合を意味している。
※※第5回調査には、第3GCに2名、第4GCに1名、第6GCに1名、第7GCに1名、第11GCに3名、それぞれ性別不明者が存在しているが、表記していない（ただし、各GC毎の合計数、総計数には、入っている）。

一人ひとりの教師は、自らの教職経験の中で、教育活動や教職というものに対する一定の考え方やイメージを形成している。それらは、教職経験を重ねていくにしたがって、より強化されていく場合もあれば、その反対に絶えず修正されたり転換されたりしていく場合もある。同時にそれらは、基本的には一人ひとり異なるものではあるが、GC・性別・職階など毎に一定の共通性もうかがわれるし、社会や教育界全体の動向によっても影響されるのである。

以下では、調査対象者たちの抱いている教師教育観としての教育観、教師の資質・力量観、及びその養成教育観について、考察していくことにしたい。その際に、主にGC間の違いに着目しつつ、かつ5回にわたる継続調査結果の比較考察を通して論究していく。その際の考察視点が、「加齢効果」「コーホート効果」「時代効果」といったものである。

1．教育観

まず教育観を把握するために、退職者を除く現職教師たちに「現在、児童・生徒に対する教育は何を一番重視すべきであると思っているか」を問い、その回答内容として用意した代表的な事柄6項目（表中明記）の中から一つを指摘してもらった結果が《図表2-a》及び《図表2-b》である。

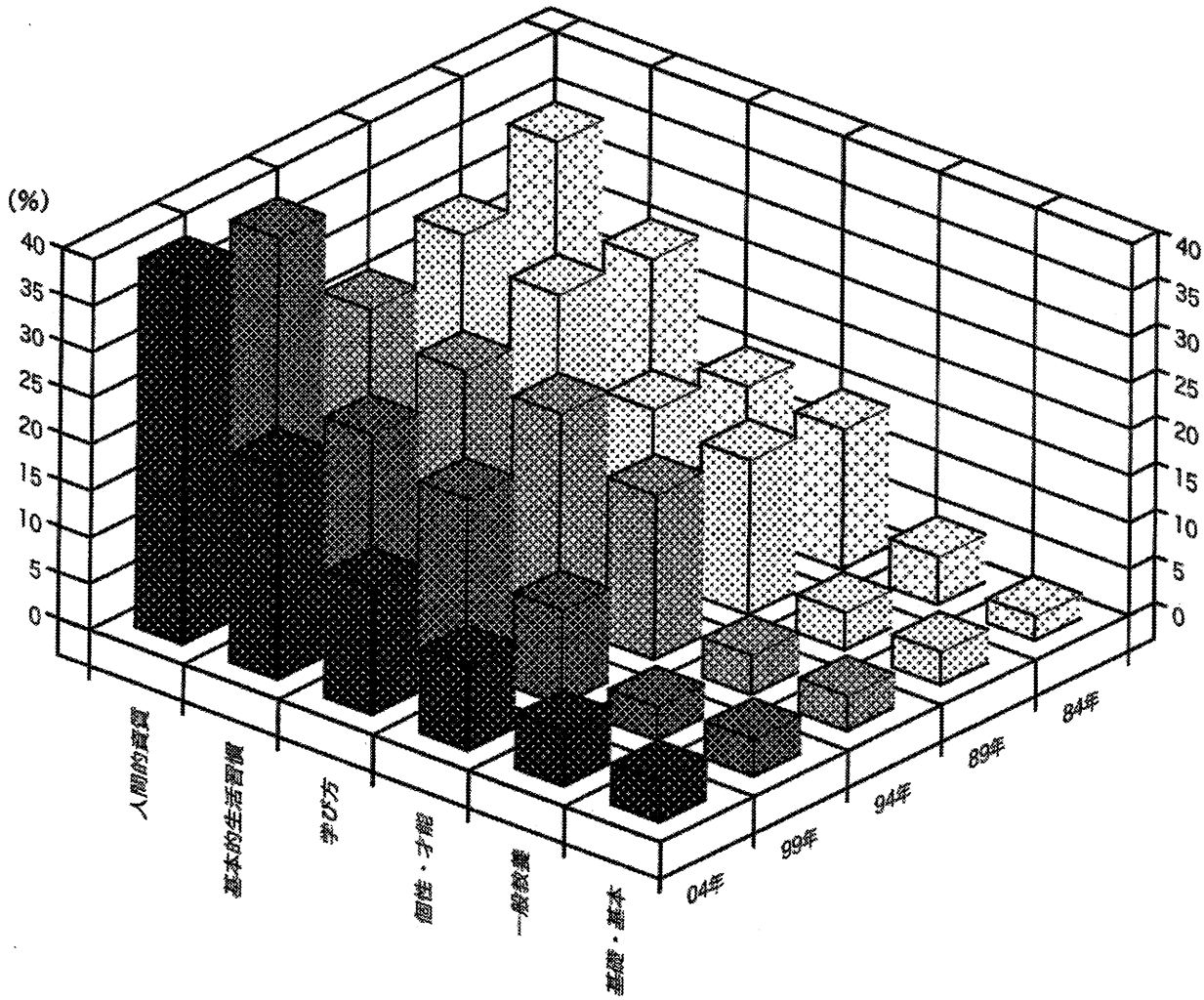
（1）教育で一番重視すべき事柄

《図表2-a》は、過去5回にわたる調査結果を比較し表示したものである。5回の調査結果とも「人間的資質：モラル・連帯性・正義感など基本的な人間的資質の形成」、「基本的生活習慣：基本的生活習慣や自立・自律能力の育成」、「学び方：未知なるものの『学び方』や『解決方法』の獲得」、「個性・才能：個性や才能の発見・開花・発達」の4項目が指摘率の高い主なものとなった点で同様な傾向を示している。「一般教養：普遍的な一般教養を身につけた人格の形成」及び「基礎・基本：科学・芸術における基礎・基本の獲得」は指摘率5％程度で、上記4項目の指摘率とは落差があった。

しかし5回の調査を通して見てみると、その指摘率の変化には各項目毎に一定の特徴がうかがわれる。すなわち、「人間的資質」は、第1回調査（1984年）から第3回調査（1994年）にかけて次第に低下するが、第4、5回調査（1999年、2004年）と再び第1回調査時の指摘率を越える数値を示している。「基本的生活習慣」は、5回の調査を通して、その指摘率が徐々に低下してきている。「学び方」は、第1、2、3回の調査で徐々に指摘率が上がっていたが、第4、5回調査で低下してきている。「個性・才能」もまた、「学び方」と同様な変化を示しているが、第4、5回調査における指摘率の低下幅が大きい。

第1～3回調査における「学び方」や「個性・才能」の指摘率の上昇は、1989年の学習指導要領改訂を挟んだ時期から1998年の同改訂に至る時期まで、教育改革のスローガンとして「問題解決力」や「個性尊重」が掲げられてきた教育界の全般的動向を反映している。しかし、1998年の同改訂直後から、いわゆる「学力低下」論議が教育界のみならず社会全体を巻き込んだ現象として起こる中で、「学び方」や「個性・才能」の指摘率は相対的に低下している。その中で指摘率を相対的に上昇させてきたのが、「人間的資質」である。この点についても、1990年代末より一つの社会現象のごとくマスコミ等において報ぜられた凶悪で残忍さを伴った各種の少年事件の勃発に象徴されるような青少年に関わるさまざまな問題行動が背景にあるように思われる。いわば全体として「時代効果」の反映がうかがわれる結果となっている。

《図表2-a》現在、教育は何を一番重視すべきと考えるか（5回の調査結果の比較）



《図表2-b》からは、GC間、性別間、所属学校種間での相違を踏まえた特徴がうかがわれる。GC間では、「人間的資質」に関しては、94年調査における支持率の全般的低下と04年調査における再上昇という時代効果の特徴が見られたのと同時に、いずれの調査でも若いGC教師層ほど相対的に支持する率が高い傾向も認められた。また、「人間的資質」とは逆に、94年調査における支持率の全般的上昇と04年調査における再低下という時代効果の反映がうかがわれた「学び方」は、第8～10GC教師層（04調査時30歳代～20歳代後半）の支持率の低下が特徴的である。しかし「個性・才能」に関しては、04年調査において全般的支持率の低下傾向があるとはいえ、第8～11GC教師層からの支持率は他のGCと比べ相対的にまだやや高い。性別間の相違に関しては一貫した傾向は認め難いが、所属学校種間の相違に関しては、「人間的資質」や「基本的生活習慣」は中学校教師から、「学び方」や「個性・才能」は小学校教師から、第1～5回調査を通して、それぞれ支持が相対的に高い傾向にあるといえよう。

（2）教育に寄せる願いの阻害要因

では、教師たちの抱いている、上記のような教育活動上の基本的な願いを実現する上で、彼（女）らは何が阻害要因となっていると感じているのであろうか。《図表3-a》と《図表3-b》は、「（その願いを実現しようとする）実践の遂行にあたって、現在何が阻害要因として存在しているか」という質問に対する回答結果を示している。表中に表記されている14項目から2つまで自由に選択してもらった。

《図表2-b》現在、教育は何を一番重視すべきと考えるか（84年、94年、04年の調査結果比較：タテ合計%）

	1GC	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	11GC	全GC
(84調査回答者数)	(265)	(275)	(253)	(214)	(172)	(153)	(173)					(1505)
(94調査回答者数)		(122)	(184)	(154)	(140)	(139)	(114)	(82)	(134)			(1069)
(04調査回答者数)				(105)	(121)	(125)	(90)	(63)	(68)	(63)	(81)	(731)
	31.3	33.5	32.0	32.7	33.7	35.3	48.6					34.7
人間的資質		18.9	25.0	25.3	29.3	21.6	29.8	35.4	29.9			26.4
				33.3	35.5	39.2	41.1	42.9	47.1	44.4	46.9	39.8
	29.8	29.5	22.9	19.6	27.9	26.1	22.5					25.7
基本的生活習慣		34.4	23.4	23.4	20.0	21.6	19.3	28.0	20.1			23.5
				24.8	23.1	24.0	24.4	23.8	16.2	28.6	19.8	22.7
	18.9	12.7	18.6	15.4	15.7	17.0	6.9					15.3
学び方		14.8	23.4	22.7	24.3	28.1	25.4	19.5	21.6			22.7
				17.1	18.2	14.4	14.4	7.9	10.3	6.3	14.8	13.8
	11.7	13.8	18.2	16.8	14.5	13.7	15.6					14.9
個性・才能		18.0	18.5	13.0	13.6	20.1	19.3	15.9	23.9			17.8
				4.8	5.8	8.0	10.0	9.5	16.2	12.7	12.3	9.2
	4.9	6.5	5.5	9.3	2.9	2.0	3.5					5.2
一般教養		8.2	3.3	8.4	5.0	4.3	2.6	0.0	0.7			4.3
				8.6	8.3	6.4	2.2	3.2	5.9	4.8	4.9	5.9
	1.5	3.3	2.0	3.3	3.5	4.6	1.2					2.7
基礎・基本		2.5	5.4	5.2	7.1	2.9	3.5	1.2	0.0			3.7
				5.7	6.6	4.0	5.6	6.3	4.4	0.0	1.2	4.4

※第5回調査（04年）の第3GCは、回答者数がわずかなため（現職者のみに回答を求めた）、表記から除外した。

	男性教師		女性教師	小学校教師		中学校教師
(84調査回答者数)	(904)		(600)	(923)		(461)
(94調査回答者数)	(628)		(441)	(703)		(307)
(04調査回答者数)	(364)		(361)	(510)		(159)
	32.3	≪	38.3	32.5	≪	38.8
人間的資質	24.5	<	29.0	25.7	<	30.0
	41.2	>	38.2	41.4	<	45.3
	26.3	>	24.8	24.4	<	28.9
基本的生活習慣	24.8	>	21.5	23.0	<	25.4
	20.3	≪	25.5	22.4	<	23.9
	14.5	<	16.3	18.0	≫	9.5
学び方	22.1	<	23.6	23.3	>	21.2
	14.0	>	13.6	14.1	>	10.1
	16.3	>	12.8	15.5	>	13.7
個性・才能	18.5	>	16.8	19.3	≫	12.7
	8.8	<	9.4	7.8	<	10.7
	6.1	>	4.0	5.1	<	5.2
一般教養	4.5	>	4.1	4.4	>	3.9
	6.6	>	5.3	6.9	>	4.4
	2.8	>	2.5	2.7	<	2.8
基礎・基本	3.8	>	3.6	3.3	<	4.9
	5.2	>	3.3	4.5	>	3.8

※記号「≫ないしは≪」は5%以上の差があるもの。

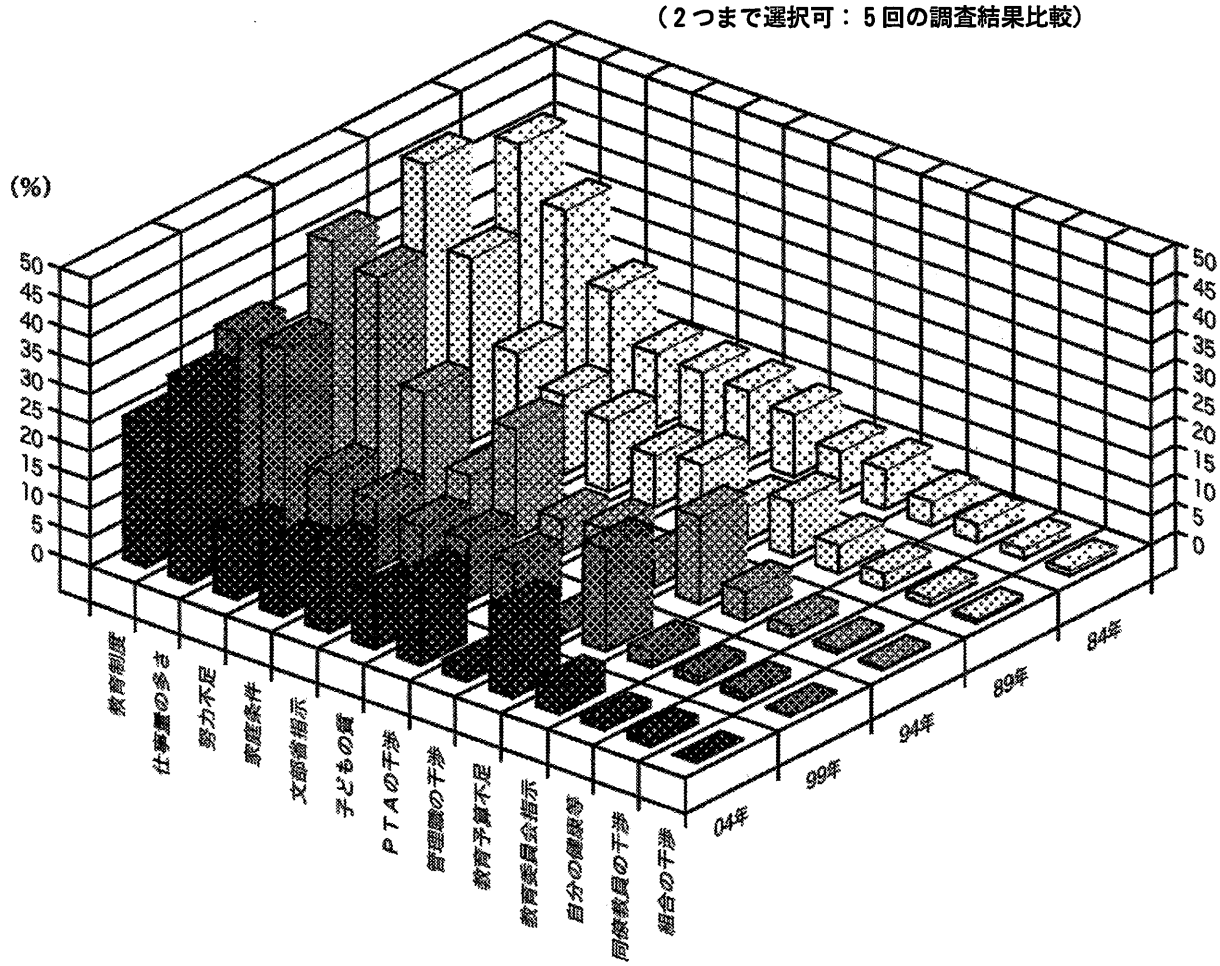
【項目名】
1．人間的資質：モラル・連帯性・正義感など基本的な人間的脂質の形成
2．基本的生活習慣：基本的生活習慣や自立・自律能力の育成
3．学び方：未知なるものの「学び方」や「解決方法」の獲得
4．個性・才能：個性や才能の発見・開花・発達
5．一般教養：普遍的な一般教養を身に付けた人格の形成
6．基礎・基本：科学・芸術における基礎・基本の獲得

《図表3-a》から「その他」を除く13項目の5回の調査結果を比較してみると、「教育制度」と「仕事量の多さ」の指摘率が高いことがわかる。しかし、第3～5回調査において、「教育制度」は次第に指摘率が低下してきており、逆に「仕事量の多さ」は上昇してきている。また、全体的な指摘率の点ではそれら2項目とはやや落差があるが、「努力不足」は「教育制度」と、「教育予算不足」は「仕事量の多さ」と、それぞれ同様の傾向にあるといえよう。さらには、「ＰＴＡの干渉」は、第1～3回調査では低下したが、第4～5回調査で再び上昇してきている傾向にあることもわかる。

次に《図表3-b》に示されている結果（04調査結果）から、GC間及び男女間の相違についてみていくことにする。「ＰＴＡの干渉」は第5～7 GC（50歳代前半～40歳代）層を中心として女性教師層から指摘率が高く、逆に「教育制度」は第6～7 GC層を中心に男性教師層からの指摘率が高いといえる。また、「教育予算不足」は、管理職指導職層の多い第5～7 GC男性教師層を中心に指摘率が高いのに対して、「努力不足」は第9～11 GC（30歳代～20歳代）女性教師層を中心に指摘率が高くなって

《図表3-a》あなたの教育の願いを実現しようとする実践の遂行にあたっての阻害要因

（2つまで選択可：5回の調査結果比較）



いる。それぞれの教職年数、職務実態、生活実態などを反映した結果といえよう。「仕事量の多さ」は、調査時に新任期に在った第11GCをはじめとして各GC・年齢段階の教師層全般から指摘率が高い。

さらに、阻害要因を、「一番重視すべき項目」との関連でみていこう。《図表3-c》は、選択肢として設定されていた6つの重視項目毎に、それらの項目を指摘した者（各項目の下に【　】内に当該項目の回答者人数を明記しておいた）が阻害要因としてどのような者を選択しているのかを、上位第5位までそれぞれの指摘率とともに整理したものである。第1位はいずれも「仕事量の多さ」であるが、第2位に関しては、「人間的資質」「基本的生活習慣」「学び方」において「教育制度」が、「個性・才能」「一般教養」「基礎・基本」においては「教育予算不足」や「文科省指示」が上がってきている。また第3位以下に関しては、「人間的資質」「基本的生活習慣」において「PTAの干渉」や「家庭的条件」が、「学び方」「個性・才能」「一般教養」「基礎・基本」においては「努力不足」が、それぞれ上がってきていることが特徴的である。「人間的資質」や「基本的生活習慣」のような子どもの人格面生活面に関わる指導に取り組むには、「仕事量の多さ」や「家庭的条件」などの時間的阻害要因によってじっくりと時間をかける余裕がないこと、また「教育制度」や「PTAの干渉」などの外的阻害要因によっても生活指導面への集中ができないこと等が意識されている。「学び方」や「個性・才能」のような従来にも増して高次元の学力・能力を育成していく指導に取り組むには、「仕事量の多さ」「教育制度」「教育予算不足」のような客体的阻害要因に加えて、「努力不足」のような指導をしていく教師の主体的な事柄が阻害要因として意識されている。さらに「一般教養」や「基礎・基本」といった事柄を重視した指導

《図表3-b》教育の阻害要因（2つまで複数選択可：04調査結果より主な6項目：タテ合計%）

		4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	11GC	全GC
(回答者実数)		(99)	(118)	(120)	(88)	(59)	(68)	(61)	(81)	(700)
(男 性)		(76)	(63)	(53)	(38)	(33)	(31)	(20)	(30)	(350)
(女 性)		(22)	(55)	(66)	(49)	(26)	(37)	(41)	(48)	(344)
PTAの干渉：	全体	12.1	10.2	15.8	15.9	23.7	19.1	19.7	12.3	15.3
	男性	13.2	4.8	7.5	10.5	24.2	12.9	20.0	10.0	11.7
	女性	9.1	16.4	22.7	20.4	23.1	24.3	19.5	14.6	19.2
教育制度：	全体	21.2	27.1	32.5	27.3	30.5	25.0	19.7	14.8	25.4
	男性	22.4	27.0	41.5	39.5	30.3	29.0	25.0	10.0	28.9
	女性	18.2	27.3	25.8	18.4	30.8	21.6	17.1	14.6	21.8
文科省指示：	全体	18.2	15.3	9.2	21.6	11.9	11.8	8.2	13.6	14.0
	男性	14.5	17.5	7.5	13.2	12.1	9.7	15.0	10.0	12.9
	女性	27.3	12.7	10.6	28.6	11.5	13.5	4.9	16.7	15.1
教育予算不足：	全体	16.2	19.5	18.3	20.5	15.3	8.8	6.6	13.6	15.6
	男性	14.5	25.4	22.6	23.7	12.1	6.5	5.0	6.7	16.3
	女性	18.2	12.7	15.2	16.3	19.2	10.8	7.3	16.7	14.2
努力不足：	全体	10.1	13.6	10.0	10.2	3.4	14.7	11.5	22.2	12.1
	男性	7.9	15.9	9.4	7.9	3.0	12.9	5.0	20.0	10.6
	女性	18.2	10.9	10.6	12.2	3.8	16.2	14.6	25.0	14.0
仕事量の多さ：	全体	21.2	33.1	35.8	38.6	40.7	44.1	36.1	45.7	35.9
	男性	23.7	27.0	28.3	36.8	36.4	45.2	35.0	50.0	32.3
	女性	13.6	40.0	42.4	40.8	46.2	43.2	36.6	41.7	39.5

※第3GCは、回答数がわずかなため（現職者のみに回答を求めた）、表記から除外した。

【項目名】
1．子ども質：児童・生徒の質の低さ
2．ＰＴＡ干渉：ＰＴＡなど父母側の干渉
3．同僚干渉：同僚・先輩教師の干渉
4．管理職干渉：教頭・校長など管理職の干渉
5．組合干渉：組合などの干渉
6．教委干渉：教育委員会などの指示（指導主事の指示・干渉なども含む）
7．文部省指示：文部省などの指示（学習指導要領などによる拘束も含む）
8．教育予算不足：教育全体ないしは学校の予算不足
9．教育制度：現在の日本の教育制度
10．家庭的条件：家事・育児などの家庭的条件
11．主体的条件：自分の健康や性格など主体的条件
12．努力不足：自分の主体的な努力不足
13．仕事量の多さ
14．その他

《図表3-c》一番重視項目×その阻害要因（第5位まで表記、カッコ内は回答者数による指摘率%）

順位 / 重視項目	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
人間的資質【N=284】	仕事量の多さ（34.9）	教育制度（29.2）	PTAの干渉（19.7）	家庭的条件（14.1）	文科省指示（12.7）
基本的生活習慣【N=161】	仕事量の多さ（32.3）	教育制度（26.7）	家庭的条件（19.9）	PTAの干渉（18.0）	教育予算不足（16.1）
学び方【N=95】	仕事量の多さ（35.8）	教育制度（24.2）	努力不足（23.2）	教育予算不足（20.0）	文科省指示（18.9）
個性・才能【N=66】	仕事量の多さ（50.0）	教育予算不足（24.2）	教育制度（22.7）	努力不足（18.2）	PTAの干渉（15.2）
一般教養【N=41】	仕事量の多さ（46.3）	文科省指示（24.4）	教育制度（22.0）	教育予算不足、努力不足（14.6）	
基礎・基本【N=32】	仕事量の多さ（46.9）	文科省指示、教育予算不足（28.1）		教育制度、努力不足（21.9）	

に取り組むには、近年揺れが激しく大きい文科省の基本方針のあり方が阻害要因として意識されているようでもある。

2．教師の資質・力量観

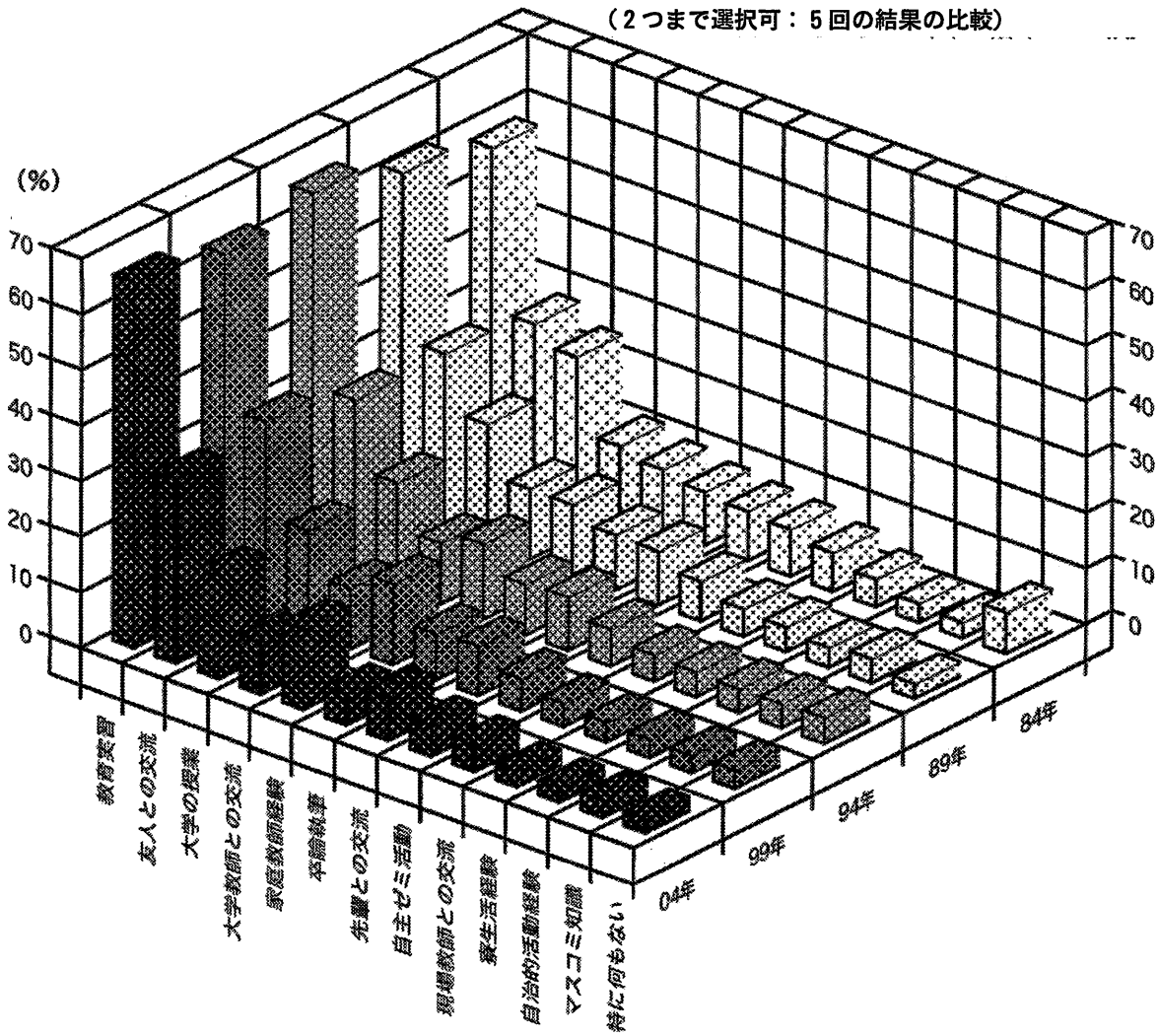
教師の資質・力量観、及びその養成教育観を把握するために、「教職活動を進めていく上で、基盤を培うことになった大学生活上の事柄は何か」、及び「教師として必要なものは何か（第1位、第2位と順位をつけて指摘）」という2つの質問を行った。それらの結果の考察に進めていきたい。

（1）教師の資質・力量観

退職者も含めて全ての調査対象者たちが、自らの教職体験を踏まえて、「あなたが教職活動を進めていく上で、基盤を培うことになった大学生活上の事柄は何ですか」という問いに対して回答することを求めた。表中に明記した「その他」を含む14の選択肢項目から重要なものを2つまで指摘してもらったが、《図表4-a》及び《図表4-b》は、その結果を表している。

《図表4-a》の方は、5回にわたる調査結果における回答者全体の数値を比較したものである。5回の調査とも6割前後の者が「教育実習：教育実習で直接子どもと接した経験」を指摘しており、他の

《図表4-a》就職活動を進めていく上で、基盤を培うことになった大学生活上の事柄



《図表４-ｂ》教職活動を進めていく上で、基盤を培うことになった大学生活上の事柄
（重要なものを２つまで選択：上段は84調査結果、中段は94調査結果、下段は04調査結果、タテ合計％）

	1GC	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	11GC	(全 体)
1984調査回答者数	(N=265)	(275)	(253)	(214)	(172)	(153)	(173)					(1505)
1994調査回答者数	(N=205)	(212)	(221)	(161)	(148)	(150)	(119)	(85)	(136)			(1437)
2004調査回答者数			(N=180)	(153)	(133)	(140)	(96)	(71)	(75)	(64)	(82)	(994)
教育実習で直接子どもと接した経験	57.7	57.1	62.8	45.8	55.8	61.4	65.9					57.9
	60.5	59.9	62.0	58.4	64.2	71.3	70.6	75.3	74.3			64.9
			63.3	56.9	61.7	73.6	63.5	70.4	65.3	70.3	76.8	65.8
家庭教師・塾講師で子どもと接した経験	6.4	12.4	10.7	8.4	8.7	11.1	21.4					11.0
	10.2	14.2	14.5	9.3	14.2	17.3	13.4	12.9	15.4			13.4
			14.4	11.3	17.3	14.8	13.5	14.1	14.7	20.3	12.2	14.4
クラス・クラブ・サークル等での友人との交流	15.8	26.2	29.6	38.8	29.7	36.6	30.1					28.6
	19.0	25.9	30.8	37.9	31.8	35.3	28.6	36.5	41.2			30.9
			28.3	38.6	33.8	28.6	33.3	35.2	36.0	26.6	42.7	33.3
下宿やクラブ・サークル等での先輩との交流	3.8	5.1	8.7	15.4	11.0	6.5	11.0					8.4
	3.4	7.1	8.1	15.5	13.5	8.7	9.2	14.1	11.0			9.5
			9.4	9.8	11.3	7.1	8.3	4.2	1.3	7.8	4.9	7.8
大学教師との交流	20.8	16.0	11.1	7.9	8.7	8.5	8.1					12.4
	20.5	14.2	11.8	5.0	9.5	10.7	7.6	3.5	5.9			10.9
			11.1	7.2	11.3	5.7	7.3	2.8	13.3	17.2	9.8	9.3
小・中・高校の教師との交流	8.3	6.2	5.5	6.1	8.1	7.2	9.2					7.1
	9.3	1.9	5.0	4.3	4.1	4.7	1.7	4.7	5.1			4.7
			5.6	1.3	1.5	3.6	5.2	7.0	5.3	12.5	7.3	4.7
自治的諸活動の経験	4.2	5.1	1.2	7.5	3.5	2.6	1.2					3.7
	5.9	7.1	2.7	5.0	2.7	2.7	4.2	2.4	2.2			4.1
			1.7	4.6	2.3	2.1	2.1	0.0	0.0	3.1	7.3	2.6
寮生活の経験	6.0	8.0	7.1	5.1	1.2	2.6	2.3					5.1
	8.3	9.0	7.2	2.5	0.0	2.0	2.5	1.2	0.0			4.4
			6.1	4.6	1.5	0.7	3.1	0.0	1.3	1.6	2.4	2.8
自主ゼミ・自主学習等で得た知識・経験	7.5	6.5	7.9	14.5	9.3	4.6	8.1					8.4
	5.4	6.6	7.2	10.6	6.1	6.7	5.9	3.5	5.1			6.5
			8.9	7.8	6.8	1.4	4.8	4.2	2.7	0.0	7.3	5.4
大学での授業から得た知識・経験	35.5	26.5	31.2	22.0	22.7	19.6	16.8					26.0
	24.4	22.6	18.6	25.5	16.2	14.7	17.6	12.9	10.3			18.9
			19.4	23.5	15.0	25.0	17.7	12.7	21.3	12.2	9.8	18.5
卒業論文作成等で得た学問研究することの経験	7.9	12.7	7.1	7.5	14.0	8.5	9.8					9.6
	8.8	12.3	7.2	9.3	8.1	8.7	10.1	5.9	8.8			9.0
			6.7	5.2	6.8	5.7	8.3	1.4	5.3	3.1	4.9	5.6
テレビ等マスメディアから得た知識	1.9	1.5	1.2	1.9	4.1	6.5	2.9					2.5
	3.4	5.7	5.4	1.2	4.7	3.3	4.2	7.1	3.7			4.2
			3.3	3.3	3.8	2.1	1.0	4.2	4.0	1.6	4.9	3.1
特に何もない	7.5	6.5	5.9	9.3	10.5	7.2	6.4					7.5
	4.9	5.7	5.0	4.3	4.7	3.3	4.2	4.7	2.9			4.5
			2.2	4.6	3.8	2.1	3.1	1.4	2.7	1.6	0.0	2.6

※ 「その他」を含む１４項目の選択肢で、「その他」「無回答」の数値は未表記。
※※04年調査においては、第１～２GCはすでに退職したコーホートのため調査対象者から除外した。

項目を引き離して、影響の大きさを示している。「教育実習」と比べ数値はおよそ半減するが、「友人との交流：クラス・クラブ・サークル等での友人との交流」及び「大学の授業：大学での授業から得た知識・経験」という事柄がそれに続いている。しかし両項目の傾向は逆であり、「友人との交流」が調査の回を重ねる毎に指摘率を上昇させてきている傾向にあるのに対して、「大学の授業」は低下させてきている傾向にある。指摘率の点では10％前後に過ぎないが、「大学教師との交流」や「卒論執筆」は「大学の授業」と、「家庭教師経験」は「友人との交流」と、それぞれ傾向を同じくしている。全体として、本来の大学教育機能を象徴している大学生活におけるフォーマルな営みが指摘率を低下させてきているのに対して、インフォーマルな営みが指摘率を上昇させてきている傾向にあるといえよう。また、表記はしていないが、「教育実習」や「大学の授業」などのフォーマルな項目は女性教師層から、「友人との交流」や「先輩との交流」などのインフォーマルな項目は男性教師層から、それぞれ相対的に指摘率が高い傾向にある。

《図表４-ｂ》は、94年調査とその10年後の04調査の結果を、GC毎に表したものである。「教育実習」は、２回の調査とも調査時20歳代～30歳代の若い教師層を中心に、各GCとも共通して高い指摘率を得ている。「友人との交流」も、調査時20歳代の若い教師層を中心として、同様の傾向にある。それに対して「大学の授業」は、２回の調査とも全体として第１～４ GC年輩教師層の指摘率は高いものの、第

5 GC以下の教師層では低下傾向にあることがわかる。

以上のように、全体的特徴として、「教育実習」の指摘率の高さ、「大学の授業」や「卒論執筆」、あるいはまた「大学教師との交流」や「自主ゼミ活動」のような本来の大学教育機能を象徴している各事柄の指摘率の低下・低迷、そしてそれらとは逆に「友人との交流」や「先輩との交流」、あるいはまた「家庭教師の経験」のような課外活動を象徴している各事柄の指摘率の上昇が認められるのである。

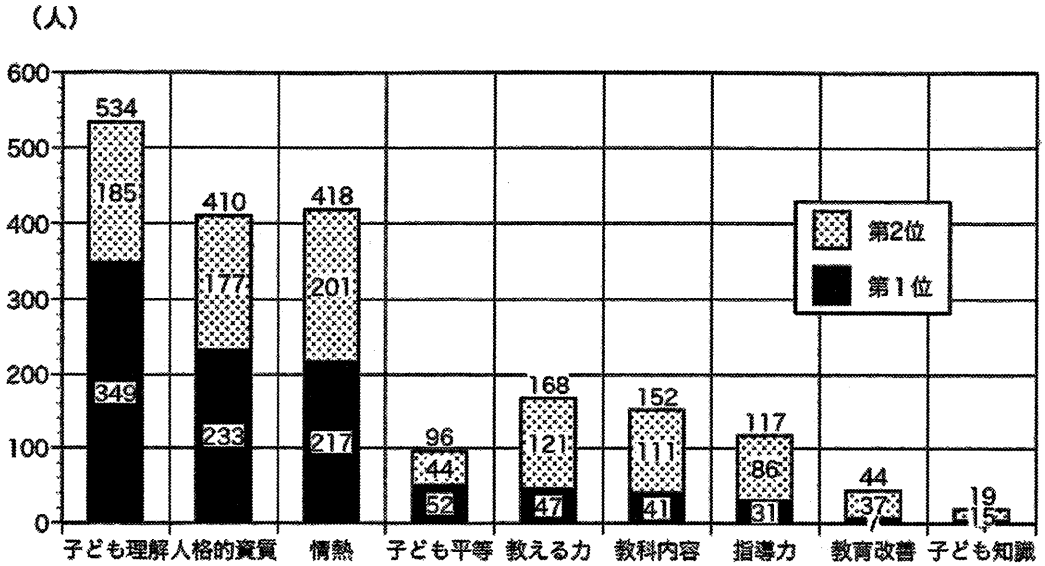
次に、「教師として一番必要なもの」をどのように考えているのかを、表中に明記した9つの項目を用意し、その中から順位を付けて2つまで指摘してもらった。《図表5-a》は、第5回調査（2004年）の結果を、各項目を第1位、第2位として指摘した人数を表したものである。「子ども理解：子どもを捉える目や理解する力を持っていること」「人格的資質：子どもの成長を導く人格的資質を持っていること」「情熱：教育活動に情熱をもって取り組むことができること」といった、いわば教職専門家としての知識や技術の質量云々以前の事柄が重要視されていることがわかる。

《図表5-b》は、94年調査及び04年調査の第1位ないしは第2位において10%以上の指摘率を得た5つの項目に関して、GC別、男女別、勤務校別に整理したものである（この質問は第1～3回調査には設定していないため1984年調査データはない）。

「子ども理解」という項目は、両調査とも第1位において全体の3分の1以上（35.7%、35.1%）の者によって指摘され、他の項目を引き離している。GC間の違いという点では、両調査とも、調査時40歳代前半から20歳代に至る教師層からの指摘が相対的に高くなっている。また同項目は、04調査結果においては、男性教師層よりも女性教師層からの、かつ中学校教師層よりも小学校教師層からの指摘率が、それぞれ高いことが特徴である。

「人格的資質」や「情熱」の2項目は、「子ども理解」に続いて第1位における指摘率が高かったものであり、かつ第2位における指摘率も第1位における指摘率とほぼ同様の数値を示しており、「子ども理解」の数値をも上回るという特徴を表している。GC間の相違という点では、「人格的資質」も「情熱」も、調査時30～40歳代教師層を中心に指摘率が高く、04調査結果においては「情熱」の指摘率の点で「子ども理解」とは逆に、女性教師層よりも男性教師層からの、かつ小学校教師層よりも中学校教師層からの指摘率が、それぞれ高い傾向にある特徴がうかがわれる。

《図表5-a》教師として必要な事柄
（04調査、 回答者総数994人の内で第1、2位に指摘した各項目毎の人数）



《図表5-b》教師として必要な事柄【第1位：上段（94調査・04調査）、第2位：下段（同）】
～第1位あるいは第2位が10%以上の指摘率を得た5項目の%値

(94調査N) (04調査N)	1GC (205)	2GC (212)	3GC (221) (180)	4GC (161) (153)	5GC (148) (133)	6GC (150) (140)	7GC (119) (96)	8GC (85) (71)	9GC (136) (75)	10GC (64)	11GC (82)	全GC (1437) (994)
子ども理解	35.1	31.6	31.2	30.4	43.2	44.0	34.5	28.2	44.9			35.7
(子どもを捉える目や			28.9	32.7	25.6	34.3	36.5	33.8	42.7	46.9	53.7	35.1
理解する力を持って	9.8	14.6	19.0	18.6	17.6	16.0	19.3	23.5	16.9			16.6
いる)			17.8	15.0	24.8	16.4	19.8	26.8	14.7	18.8	15.9	18.6
人格的資質	21.5	22.2	29.0	28.0	24.3	23.3	26.9	37.6	14.7			24.7
(子どもの成長を			25.0	22.9	32.3	27.1	24.0	25.4	14.7	7.8	18.3	23.4
導く人格的資質を	16.1	18.9	21.7	20.5	19.6	23.3	20.2	18.8	24.3			20.3
持っている)			17.8	15.7	16.5	22.1	19.8	8.5	24.0	17.2	17.1	17.8
教科内容	6.8	7.5	6.8	6.2	1.4	4.0	0.0	2.4	1.5			4.7
(教える教科内容に			5.6	7.8	1.5	5.0	4.2	2.8	1.3	1.6	2.4	4.1
についての専門的	12.7	9.9	10.9	14.3	6.8	11.3	10.1	12.9	8.1			10.8
知識を持っている			12.2	12.4	12.0	2.9	18.8	12.7	13.3	9.4	8.5	11.2
教える力	2.4	1.9	1.8	1.2	0.7	2.7	2.5	4.7	1.5			2.0
(子どもに知識や			6.7	4.6	3.8	5.7	3.1	2.8	5.3	4.7	3.7	4.7
技能を教える力を	8.8	5.2	3.2	6.2	8.8	6.7	8.4	3.5	13.2			7.0
持っていること)			9.4	10.5	13.5	12.9	9.4	18.3	12.0	7.8	19.5	12.2
情 熱	15.1	21.7	20.4	23.6	22.6	20.7	26.1	21.2	22.8			21.2
(教育活動に情熱を			20.6	22.9	28.6	20.7	21.9	18.3	24.0	25.0	12.2	21.8
持って取り組む	25.4	23.6	29.4	26.7	28.4	23.3	18.5	18.8	17.6			24.3
ことができる)			20.6	24.2	20.3	23.6	20.8	18.3	13.3	21.9	12.2	20.2

(04調査N)	男性教師 (484)		女性教師 (502)		小学校教師 (510)		中学校教師 (159)
子ども理解	27.5	≪	42.2		40.0	≫	29.6
	19.0		18.3		21.2		14.5
人格的資質	24.0	>	23.1		23.9	>	20.1
	15.9		19.5		16.9		23.9
教科内容	5.0	>	3.0		2.9	<	5.7
	14.7		8.0		10.2		14.5
教える力	5.4	>	4.2		3.7	<	5.7
	11.0		13.5		13.5		14.5
情 熱	27.5	≫	16.5		20.6	<	28.3
	18.4		22.1		20.8		16.4

※記号「≫あるいは≪」は、10%以上の差があることを示している。

【項目名】
1．子ども理解：子どもを捉える目や理解する力を持っていること
2．子ども知識：子どもの心や身体についての専門的知識を持っていること
3．子ども平等：子どもを差別せず、平等に接することができること
4．教科内容：教える教科内容についての専門的知識を持っていること
5．教える力：子どもに知識や技能を教える力を持っていること
6．指導力：子どもの行動や態度面を指導していく力を持っていること
7．人格的資質：子どもの成長を導く人格的資質を持っていること
8．教育改善：教育活動を批判的反省的に振り返り、改善していくことができること
9．情熱：教育活動に情熱をもって取り組むことができること

「教科内容：教える教科内容についての専門的知識を持っている」や「教える力：子どもに知識や技能を教える力を持っている」の2項目は、教育者の専門的力量を象徴するものである。第1位における指摘率は低いが、第2位における指摘率が10%を超えたものである。とくに「教える力」は04調査結果（第2位）において指摘率が上昇した項目である。GC間、男女間、勤務校種間の相違は、顕著には見られなかった。

3．養成教育観

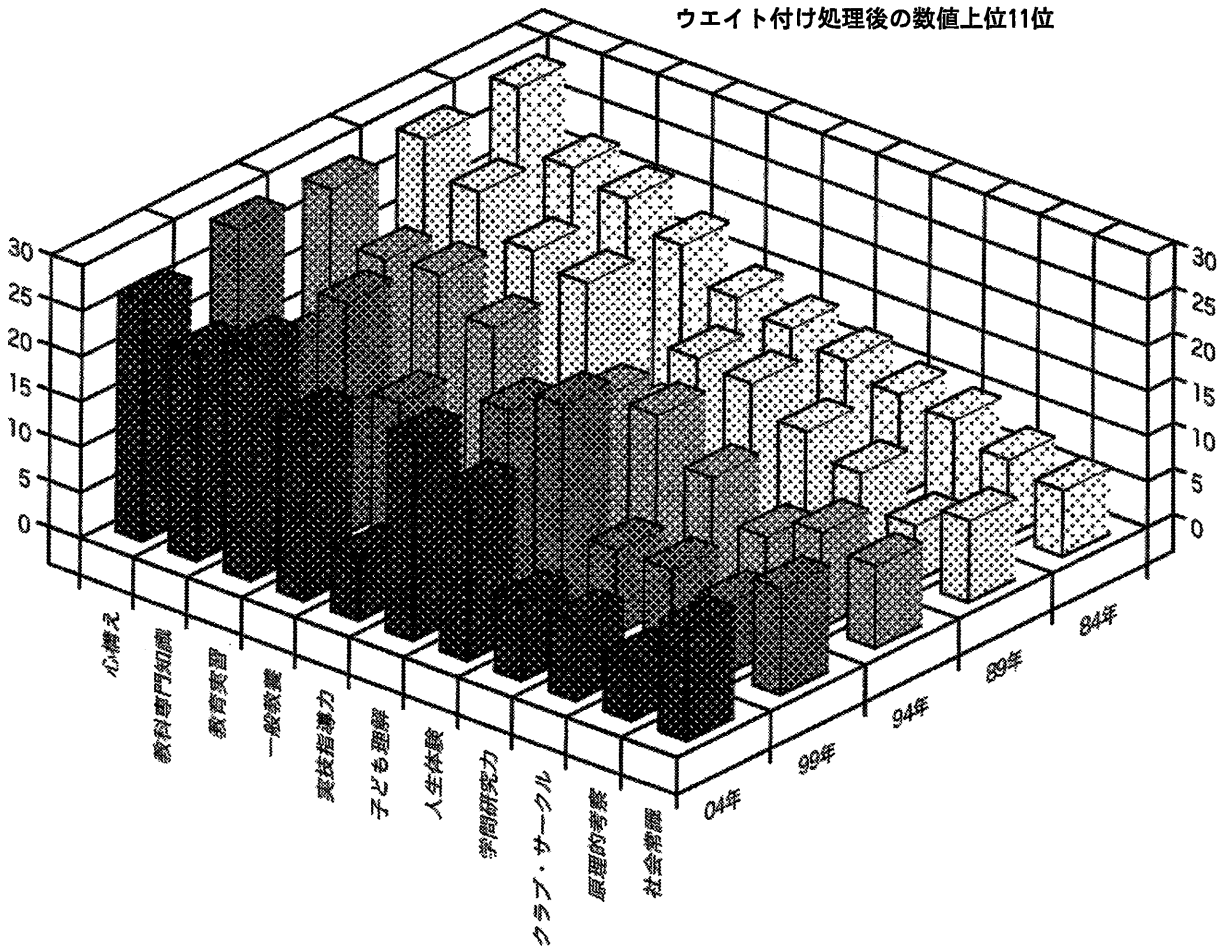
さて、以上のような資質を獲得するためには「大学時代においては、どのような学習領域、あるいはどのような体験を得ておくことが必要であるか」という質問結果を考察していこう。いわば調査対象者たちの養成教育観ともいえるべき内容である。

（1）全体的特徴

この質問に対しては、「その他」を含む表中明記の19の項目の中から順位を付けて3つまで指摘してもらった。《図表6-a》及び《図表6-b》は、その結果を表したものである。

まず、5回の調査結果を比較し全体的な傾向を示したものが《図表6-a》である。順位のウエイト付け（その算出方法は、簡便法を利用して試みたが、図表中に明記しておいた）を行い、数値の上位11項目を表記したのである。5回の調査を通して、「心構え：教師としての心構え、考え方」がほぼ同様の数値で第1位を占めてきているが、「教育実習」や「子ども理解：子どもの実態理解」が次第に数値

《図表6-a》現大学時代において必要な学習領域・体験（5回の調査結果の比較）



※上記の数値は、〔（第1位の選択者数）×3＋（第2位の選択者数）×2＋（第3位の選択者数）×1〕÷〔（回答者総数）×3〕によってウエイト付け処理し算出したもの

を上昇させてきている。また数値の高さという点ではやや劣るが、「幅広い一般教養」「幅広い人生体験」「社会生活上の常識」といった3項目も第4～5回調査において数値を上昇させてきている。逆に「実技指導力：実技に関する力」「学問研究の力」「教育の原理的考察」といった項目が数値を低下させてきている。

全体として、「子ども理解」も含めた前者の諸項目、すなわち人間的な資質に関するものの指摘が上昇してきており、「実技指導力」など後者の諸項目、すなわち教職の専門的な力量に関するものの指摘が相対的に低下してきているといえよう。

04年調査結果にもとづいてGC間毎の指摘率（第1～3位）を示したのが《図表6-b》である。この結果からは各GC間の違いが比較的明瞭に読み取れる。

教職歴の長い年輩教師層である第1-4 GCには「心構え」の支持が相対的に高いが、若手教師層である第8～11 GCの支持は低い。上述したような全体的な傾向における同項目の支持の高さは年輩教師層における支持の高さを反映しているといえよう。また年輩教師層においては、それに続いて「教科の専門的知識」が第1位及び第2位において、「教育の原理的考察」が第1位において、それぞれ比較的多くの支持を得ていることも認められる。

しかし他方で、04調査時において40歳代にあたる第6 GCあたりから「教育実習」が次第に多く指摘

《図表6-b》大学時代に必要な学習領域・体験（04調査結果：各項目上から第1位、第2位、第3位の指摘率%）

(調査回答者数)	1GC (205)	2GC (212)	3GC (180)	4GC (153)	5GC (133)	6GC (140)	7GC (90)	8GC (71)	9GC (75)	10GC (64)	11GC (82)	04全体 (994)
	15.6	11.8	8.3	7.2	9.8	5.0	1.0	0.0	1.3	1.6	2.4	5.1
教育の原理的考察	2.4	3.8	1.1	2.6	1.5	2.1	1.0	4.2	0.0	1.6	1.2	1.7
	2.4	1.9	1.1	0.7	2.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.9
	30.7	33.0	33.3	23.5	17.3	20.7	12.5	4.2	16.0	7.8	6.1	18.6
教師の心構え・考え方	10.2	9.4	10.6	8.5	11.3	7.1	9.4	4.2	8.0	6.3	7.3	8.6
	6.8	3.8	6.7	7.2	5.3	8.6	7.3	4.2	5.3	4.7	3.7	6.2
	3.4	3.8	3.3	3.3	3.8	2.1	2.1	7.0	5.3	1.6	13.4	4.2
教授技術の修得	5.4	4.7	8.3	5.2	6.8	3.6	3.1	2.8	0.0	3.1	4.9	4.8
	4.9	1.4	2.8	1.3	5.3	7.1	6.3	5.6	4.0	6.3	9.8	4.9
	5.9	2.4	4.4	2.0	3.8	3.6	0.0	4.2	1.3	4.7	1.2	2.9
実技に関する力	12.2	7.1	10.0	2.9	1.5	2.1	2.1	2.8	2.7	9.4	4.9	4.8
	3.9	5.7	2.8	3.9	1.5	2.1	4.2	2.8	1.3	4.7	0.0	2.6
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
指導案の書き方	1.5	0.5	0.6	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
	0.5	0.5	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	8.3	6.1	9.4	9.8	16.5	10.0	16.7	14.1	10.7	17.2	15.6	12.7
子どもの実態理解	11.7	9.9	13.9	9.8	11.3	14.3	8.3	7.0	13.3	6.3	8.5	11.0
	6.8	6.6	7.8	5.9	5.3	5.0	2.1	11.3	4.0	4.7	12.2	6.3
	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
道徳や特活の理解	1.5	0.5	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	1.5	1.4	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	1.6	0.0	0.6
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.2
教育制度や法規の理解	0.5	0.5	0.0	0.7	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
	0.5	0.5	0.0	0.7	0.0	0.0	1.0	1.4	1.3	0.0	0.0	0.4
	3.9	2.4	0.6	1.3	3.8	0.0	0.0	0.0	1.3	0.0	1.2	1.0
現代の教育問題	2.4	2.4	2.8	1.3	6.0	5.0	1.0	2.8	0.0	0.0	0.0	2.5
	2.9	0.9	1.7	5.9	0.8	2.9	3.1	4.2	8.0	3.1	1.2	3.2
	3.9	7.1	7.8	8.5	12.0	20.7	20.8	22.5	13.3	26.6	19.5	15.2
教育実習	7.8	8.5	7.8	11.1	6.0	12.9	13.5	14.1	10.7	9.4	9.8	10.3
	5.9	6.1	5.6	11.8	16.5	10.0	12.5	11.3	17.3	6.3	6.1	10.7
	11.2	12.3	12.8	18.3	6.8	7.1	6.3	11.3	13.3	10.9	8.5	10.9
教科の専門的知識	19.0	17.5	12.2	17.0	14.3	8.6	15.6	14.1	16.0	9.4	14.6	13.5
	5.4	7.5	10.0	7.8	6.8	10.7	10.4	7.0	8.0	7.8	9.8	8.9
	5.4	5.2	3.3	6.5	3.0	2.9	5.2	2.8	2.7	0.0	3.7	3.6
学問研究の力	3.9	4.7	6.1	6.5	3.8	5.0	4.2	4.2	8.0	6.3	4.9	5.4
	5.4	7.5	5.0	5.2	2.3	7.1	3.1	1.4	2.7	0.0	2.4	3.8
	4.4	6.1	5.0	7.8	7.5	9.3	8.3	8.5	9.3	3.1	9.8	7.5
幅広い一般教養	13.2	11.3	11.7	11.8	11.3	12.1	10.4	12.7	12.0	14.1	7.3	11.5
	16.6	13.2	14.4	14.4	15.8	12.1	11.5	16.9	9.3	9.4	20.7	14.0
	0.0	0.0	0.6	0.7	0.8	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4
芸術や文学等の素養	1.0	2.4	0.6	2.0	1.5	1.4	1.0	0.0	0.0	0.0	1.2	1.0
	3.9	5.2	4.4	0.7	1.5	2.1	1.0	1.4	0.0	3.1	0.0	1.8
	0.0	1.9	1.7	1.3	4.5	7.9	5.2	7.0	6.7	1.6	1.2	3.9
社会生活上の常識	2.9	6.6	3.3	4.6	7.5	10.0	13.5	4.2	4.0	12.5	8.5	7.1
	7.8	9.0	10.6	7.2	17.3	8.6	14.6	8.5	12.0	10.9	4.9	10.6
	1.0	0.9	1.7	2.0	3.0	2.9	4.2	2.8	4.0	3.1	2.4	2.7
クラブ・サークル等の経験	1.5	4.7	2.8	3.3	2.3	3.6	6.3	9.9	6.7	6.3	12.2	5.0
	2.9	4.2	5.0	9.8	3.0	6.4	10.4	11.3	4.0	15.6	8.5	7.5
	1.0	1.9	0.6	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.3
自治的諸活動	0.0	0.9	0.6	0.0	3.0	1.4	2.1	1.4	1.3	0.0	0.0	1.1
	0.0	0.0	0.6	0.7	2.3	2.1	0.0	2.8	1.3	0.0	0.0	1.1
	3.9	1.9	2.8	3.3	5.3	5.0	16.7	14.1	13.3	14.1	12.2	7.9
幅広い人生経験	1.5	3.8	4.4	5.9	10.5	7.1	8.3	14.1	14.7	10.9	14.6	9.0
	17.6	18.4	16.7	12.4	12.0	11.4	12.5	9.9	13.3	18.8	19.5	13.9

※ただし、第1-2GCの数値は、1994年調査時のもの。「その他」は未表記。

され始めている。同様に、40歳代前半にあたる第7GCから「大学以外での幅広い人生体験」が多く指摘され始めている。上述したように、全体的傾向における「教育実習」の支持の高さや、5回の調査ごとに支持を上昇させてきている「人生体験」の支持は、40歳代以下の教師層における支持の高さが反映しているといえよう。

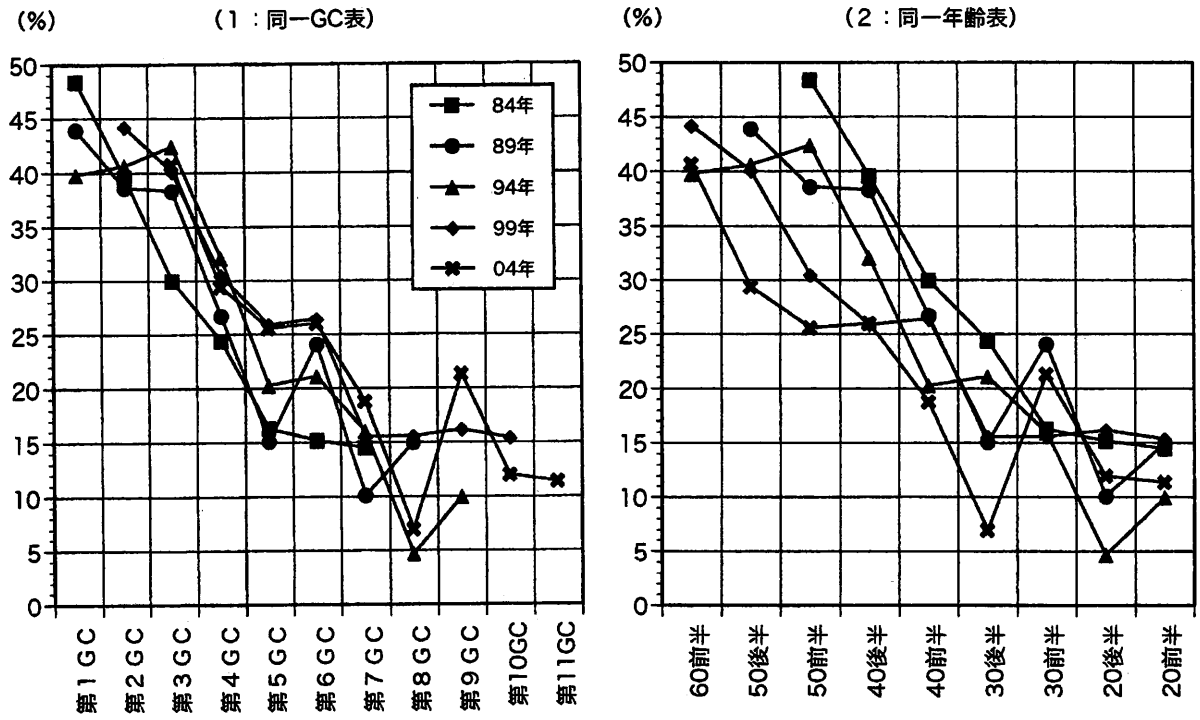
全体的な傾向において比較的支持の高かった「幅広い一般教養」や「子ども理解」の項目は、第1位の指摘率において際立った数値を示しているわけでもなく、また各GC間で一定の傾向性が認められるわけでもなかった。しかし、ともに第2位ないしは第3位での指摘率において注目しておくべき数値を

示している。「教授技術の習得」「実技に関する力」「指導案の書き方」などの具体的な教育技術に関係する項目は、第1位のみならず、第2位、第3位においても各GCとも全体的に指摘率が低いといえよう。

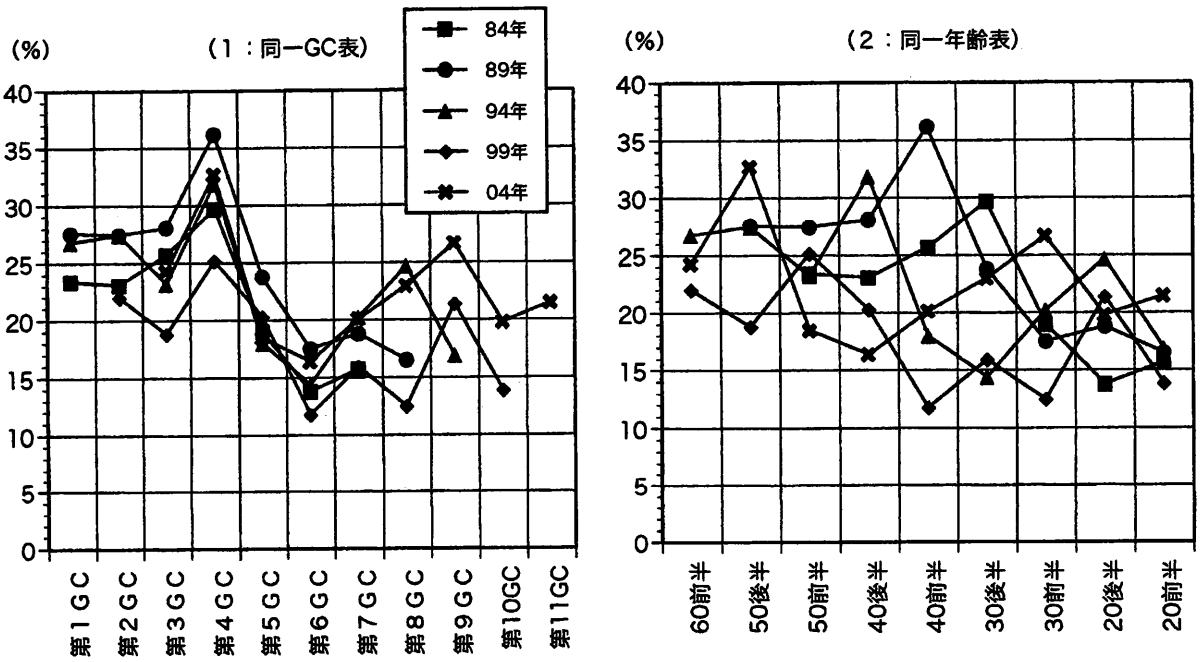
（2）コーホート分析における特徴

このような各GC間の相違と傾向を、5回にわたる調査結果を比較することによって、さらに考察し

《図表7》「教師としての心構え」の支持

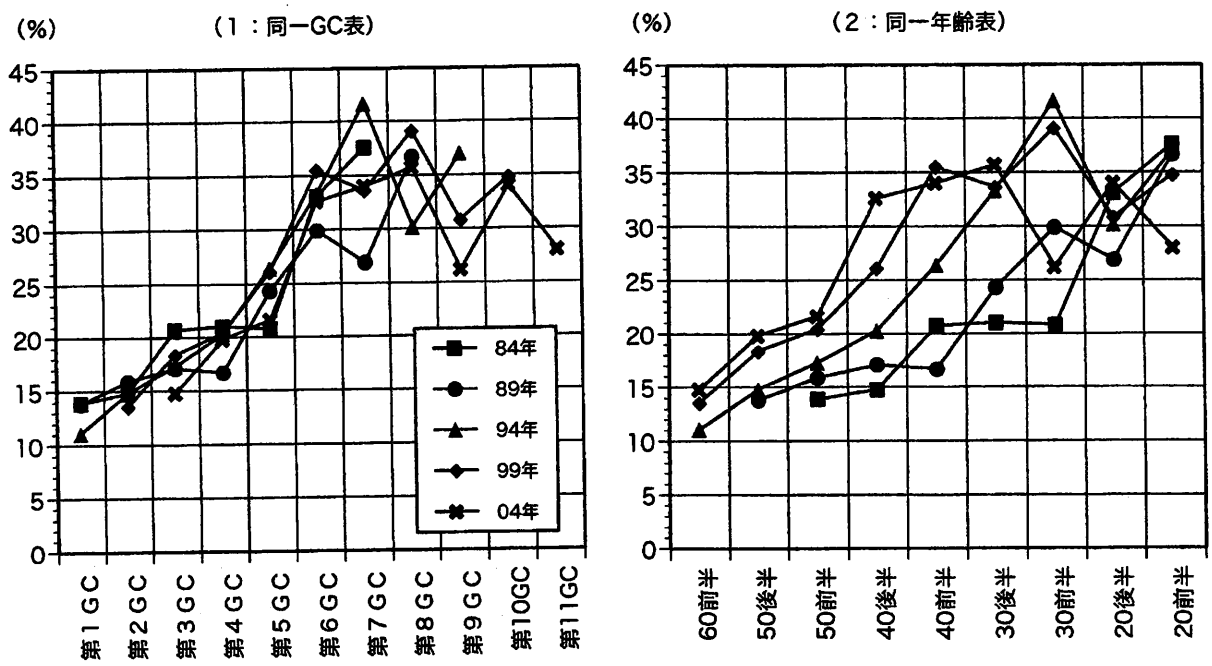


《図表8》「教科の専門的知識」の支持

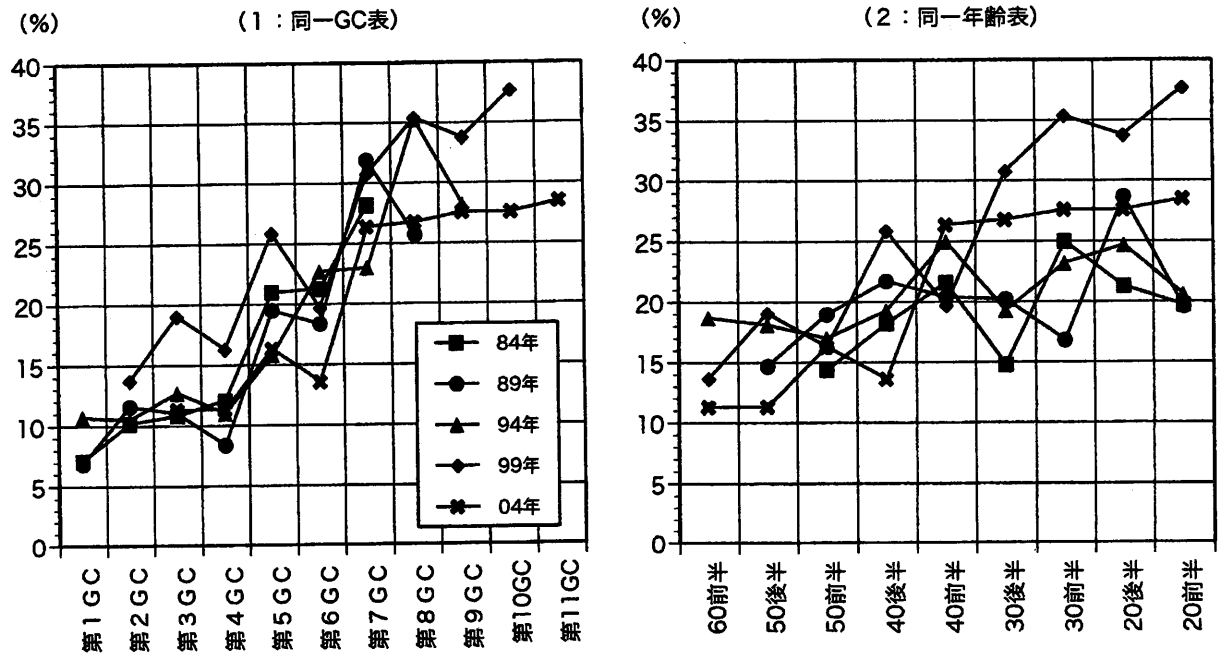


ていきたい。《図表７》～《図表12》は、６つの項目に関して、指摘の順位も考慮してウェイト付け処理を行ない、主な項目の支持値を表したものである（その算出方法は、上述の全体的な傾向を示したものと同様である）。５回にわたる調査の間隔はそれぞれ５年であるから、第１回から第５回の調査までには20年間が経っていることになる。それぞれの質問に対する回答結果は、各GCが回答した５回の調査時点での数値をX軸上の同一カテゴリーとして表わしたもの（「1：同一GC表」）と、各GCが回答

《図表９》「教育実習」の支持



《図表10》「大学以外での幅広い人生体験」の支持

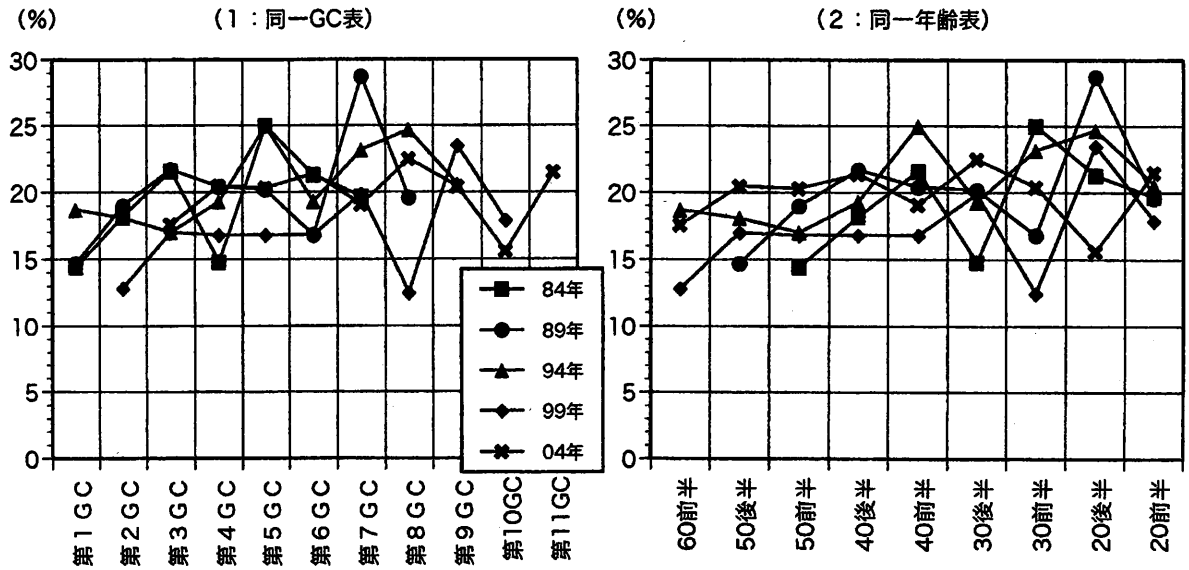


した5回の年齢段階での数値をX軸上の同一カテゴリーとして表わしたもの（「2：同一年齢表」）との2つの図表によって示した。その2種類の図表によって、「加齢効果」「コーホート効果」「時代効果」の影響を考察しようとしたのである。

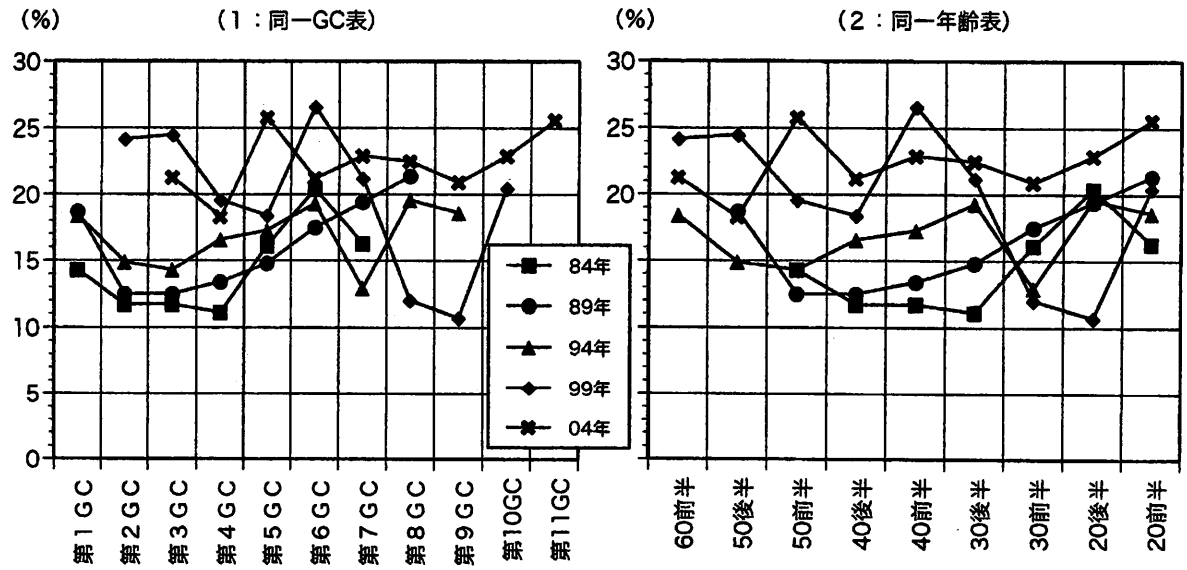
その6項目をGC間の傾向性に基づいて3つに分類すると、年齢段階の高い教師層になるにつれて支持を高めていく「心構え」と「教科の専門的知識」、逆に若手の教師層になるにつれて支持を高めていく「教育実習」や「人生体験」、そして各GCとも比較的同様な支持値を示している「一般教養」や「子ども理解」、となる。

「心構え」は、年齢段階の上昇とともに次第に支持値も高まり、その支持値の高低幅が他の項目と比べて大きい項目である。また「2：同一年齢表」からは調査時点とともに全体として支持値が低下しているという時代効果もうかがわれる。「教科の専門的知識」は、「心構え」のように明瞭ではないが、年

《図表11》「幅広い一般教養」の支持



《図表12》「子どもの実態理解」の支持



齢段階とともに支持値を高めていく傾向にある項目であるが、その支持値自体の高さは「心構え」項目ほどではない。「1：同一GC表」において5回の調査結果は第6-1 GCで比較的一致した数値を示し、コーホート効果をうかがわさせるが、特に第4 GCの数値は注目に値する。

それらの項目とは逆の傾向性を示した項目が「教育実習」と「人生体験」である。年齢段階の上昇とともに次第に支持値は低下する傾向を示している。「教育実習」は、「1：同一GC表」において5回の調査結果が第6～1 GCで比較的一致した数値を示しており、コーホート効果をうかがわせるが、「2：同一年齢表」においても年齢段階の上昇とともに支持値が低下する傾向も重なっており加齢効果をうかがわせる。また30歳代後半から40歳代の数値からは調査時点とともに全体として支持値が低下しているという時代効果もうかがわせる。

「人生体験」は、全体傾向を「教育実習」と同じくしており、「1：同一GC表」からはコーホート効果をうかがわせるが、「2：同一年齢表」からは「教育実習」ほどの加齢効果や時代効果の傾向を示してはいない。

「一般教養」と「子どもの実態理解」は、各GCとも支持値20前後を平均的に示している項目である。しかしこの一見「各GCとも平均的な数値の表れ」は、前掲の《図表6-b》からも読み取れるように、ウエイト付け処理が行われることによって指摘順位における各GC間の指摘率の違いが相殺される形での「平均的表れ」なのである。とくに、「子ども実態理解」は、第1位において若手の教師層の、第2位においては年輩の教師層の、それぞれ指摘率が高い結果ゆえの「平均的表れ」といえる。また「子どもの実態理解」では、調査時点とともに全体として支持値が上昇しているという時代効果も一部うかがわせている。

4．入職以前に形成される教職イメージ

本調査結果の先の報告（注1に明記）においては「入職後の教職イメージ」変容に関して新しいデータを加えながら論述しておいた。その「教職イメージ」変容に関する論述を補う意味を込めて、本報告の最後として、「入職以前に形成される教職イメージ」問題について2つの質問結果をもとに論述しておきたい。

（1）被教育体験

2つの質問のうちの第1は、被教育体験において出会った教師からの影響に関するものである。教師一人一人の「被教育体験」は、教職選択のみならず、最初の教職イメージの形成や、入職後の、とりわけ新任期の教育実践の進め方にも大きな影響を及ぼしている。それぞれの教師が自らの被教育体験上で出会った教師から、どのような点で影響を受けたと考えているのか、それはGC間、男女間、出会った教師の学校段階（小中）間でどのような相違がみられるのか、それぞれが形成することになる「理想的な教職イメージ」の内実に直結している。

《図表13-a》は、「大学までの学校生活において、教職を志望したり、あるいは教育実践を行っていくのに際して、少なからぬ影響をあなたに与えた教師がいたか」という質問と、「（「いた」と答えた者に対して）それは、小・中・高・大学のいずれにおいてか」という質問に対する第5回調査（2004年）結果を中心にGC別に表したものである。また、《図表13-b》は、同様の結果を男女別・勤務校種別に表したものである。

全体として、いずれのGCも「いた」と答えた者の割合が70～90%余りと高く、とりわけ第4回調査以降対象者に加えてきた第10、11 GC（2004年調査時点における20歳代教師層）においては90%を超える高さとなっている。

《図表13-a》大学までの学校生活において、教職選択や教育実践遂行に影響を受けた教師の存在、その学校段階
（各GC毎タテ合計%）

	1GC	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	11GC
有	71.4	70.3	67.0	71.9	70.7	75.0	82.3	93.0	81.3	90.6	93.9
小学校	30.7	18.4	19.5	35.5	35.3	49.6	41.9	53.0	51.7	60.3	52.0
中学校	8.3	27.4	28.1	34.5	44.1	43.1	55.7	45.4	51.7	43.0	48.1
高　校	9.3	11.3	11.3	8.2	26.7	24.9	24.2	10.6	6.8	17.2	11.7
大　学	19.0	9.9	5.9	3.6	9.7	10.6	6.4	6.0	10.0	6.8	5.2
その他	3.9	0.9	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.5	1.7	0.0	1.3

※第1－3GCの数値は、第3回目調査時（1994年）のものである。「無回答」は未表記。

《図表13-b》大学までの学校生活において、教職選択や教育実践遂行に影響を受けた教師の存在、その学校段階
（第4～11GC全体の男女別、勤務校別クロス集計）

性別（実人数：構成%）	男（293：45.1）				女（351：54.0）			
現在の勤務校（実人数：構成%）	小学校（168：57.3）		中学校（93：31.7）		小学校（238：67.8）		中学校（33：9.4）	
影響を受けた教師（実人数：構成%）【実人数：構成%】	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
	(55：32.7)	(59：35.1)	(13：14.0)	(47：50.5)	(100：42.0)	(55：23.1)	(6：18.2)	(15：45.5)
	【71：42.3】	【76：45.2】	【20：21.5】	【56：60.2】	【136：57.1】	【90：39.9】	【13：39.4】	【24：72.7】

※「性別」には不明者、「現在の勤務校」には退職者、「影響を受けた教師」には「無し」が、それぞれいるため100%となっていない。
※※「影響を受けた教師」の【　】内数値は、複数回答として「小」「中」も回答した者の人数も含めて計算したものである。

「影響を受けた教師の学校段階」は、「小学校」が多く第8～11GCの20～30歳代教師層では50%以上の者から指摘されている。「中学校」も同様な傾向を示しているが、「高校」は第5～7GCにおいて増加傾向を示したものの、その後第8GC以降は減少傾向にある。また「大学」は、新制大学・学部の創設期に学生生活を送った第1GCにおいて20%ほどの高い割合を示しているものの、第2GC以降は小・中・高校に比べて一貫して相対的に低い指摘率にとどまっている。

《図表13-b》からは、男女ともに中学校教師の場合は被教育体験において「中学校教師」に影響を受けたとする者の割合が相対的に多いが、小学校教師の場合は男女間に傾向の違いが見られる。すなわち、女性で小学校教師層の場合は被教育体験において「小学校教師」から影響を受けたとする者の割合が多いが、男性で小学校教師の場合は「中学校教師」から影響を受けたとする者の割合の方がやや多いのである。被教育体験において教師から影響を受ける場合の男女間の相違がうかがわれる結果となっている。

では、その影響とは、いかなる内容のものであったのか。その点について、「A：主に子どもとの関わりに関する事柄」「B：主に教育実践の方法に関する事柄」「C：主に教師あるいは人間としての生き方に関する事柄」の3つのカテゴリー毎に各5項目を設定し、それらに「16. 反面教師的」と「17. その他」の2項目を加えた、合計17項目を選択肢として用意し、複数選択可で回答を求めた。その結果を整理したものが《図表13-c》である。

まず、第1～11GCを4つのグループに分けて、それぞれのカテゴリー小計指摘率量の全体傾向からみていこう。［A：主に子どもとの関わりに関する事柄］は、第1-3GC及び第10-11GCの教師層からのカテゴリー小計指摘率量が他のGC教師層に比べて高い点では共通しているが（第1-3GC：178.8、149.7、第10-11GC：175.5、148.8）、第1-3GCでは「1. 平等な扱い」や「2. 心を理解」が、それに対して第10-11GCでは「3. 厳しさ」や「4. 密な交流」が。それぞれ相対的にやや高くなっ

【《図表13-c》の17選択肢の項目名】

［A：主に子どもとの関わりに関する事柄］
1．平等な扱い：一人一人の子どもを平等に扱い、接すること。
2．心を理解：一人一人の子どもの心の内面をとらえ、それに理解と共感を示すこと。
3．厳しさ：時に応じては厳しく叱るなど、良い意味での厳しさをもつこと。
4．密な交流：子どもとよく遊び、交流をもち、体当たりで接すること。
5．悩み相談：個人的な悩み事の相談にも親身になって応ずること。
［B：主に教育実践の方法に関する事柄］
6．専門的知識：教育実践を支える専門的知識や技術をしっかりと身につけていること。
7．授業の準備：教材研究や授業展開の構成など、授業の準備を丹念にしておくこと。
8．授業の創意工夫：授業の方法・技術を自分で創意工夫し、たえず子どもたちを引きつけておくようにすること
9．集団をまとめる：子ども（学級）集団のまとまりを追求し、指導していくこと。
10．教科外指導：教科指導以外の生活指導や部活指導、あるいは進路指導にも熱心に力を注ぐこと。
［C：主に教師あるいは人間としての生き方に関する事柄］
11．豊富な知識：教師として常によく勉強し、豊富な知識・技術を身につけていること。
12．仕事に誇り：教師という職業に誇りを持ち、その仕事の楽しさを語り、あるいは感じさせるようであること。
13．常に情熱：物事に対して常に情熱をもって、前向きに取り組むこと。
14．誠実さ：一個の人間として常に誠実さを忘れないこと。
15．精神的若さ：一個の人間として常に精神的な若さを忘れずにいて、健康であること。
［D：上記以外の事柄］
16．反面教師的：反面教師的な影響を受けた。
17．その他の事柄

ており、両者間の相違がみられる。第10-11 GC若手教師層には、がむしゃらに子どもたちの中に飛び込んでいこうとしている自分たちの姿と重なって恩師たちの「熱血ぶり」側面が影響内容として記憶に残っていることがうかがわれる。

［C：主に教師あるいは人間としての生き方に関する事柄］も、第1-3 GC及び第10-11 GCの教師層からのカテゴリー小計指摘率量が他のGC教師層に比べて高い点では共通している（第1-3 GC：160.6、171.8、第10-11 GC：132.1、130.7）。しかし、両者の指摘率には差があり、第1-3 GC教師層の指摘率がかなり高いことがわかる。その違いをもたらしているのは、「11．豊富な知識」と「12．仕事に誇り」の2項目に対する指摘率の違いである。この2項目に関する第10-11 GC教師層の指摘率は第4-6 GC及び第7-9 GC教師層の指摘率よりも低いものとなっている。第10-11 GC若手教師層には、被教育体験における恩師たちの職業人としての幅広い教養や誇りといった側面はあまり影響内容として残っていないことがうかがわれる。

［B：主に教育実践の方法に関する事柄］に関しては、上記カテゴリー〔A〕や〔C〕に比べてカテゴリー小計指摘率量の少ないことが特徴的であるが、第7-9 GCと第10-11 GCにおいて「影響を受けた教師の学校段階」が「小学校」であったか「中学校」であったかによってもカテゴリー小計指摘率量に大きな違いが生じている点にも特徴がある（第7-9 GC：70.2と118.2、第10-11 GC：84.8と135.9）。すなわち、「小学校」であったと回答した者よりも「中学校」であったと回答した者の方が40～50％ほどカテゴリー小計指摘率量は多いと同時に、その違いを生み出している要因として「6．専門的知識」と「10．教科外指導」における小中間の指摘率の違い（小＜中）である。中学校教師の仕事上の特質とその影響内容が端的にうかがわれる結果である。

《図表13-c》大学までの学校生活において、 教職選択や教育実践遂行に影響を受けた教師の影響内容（複数選択可、タテ合計%）

	1-3GC				4-6GC				7-9GC				10-11GC			
（影響を受けた教師の学校別数）	（小：142）		（中：137）		（小：98）		（中：100）		（小：67）		（中：66）		（小：53）		（中：39）	
（同上男女内訳数）	（90）	（52）	（99）	（38）	（38）	（59）	（64）	（36）	（25）	（42）	（36）	（29）	（11）	（42）	（20）	（19）
1．平等な扱い	39.4		27.7		21.4		18.0		11.9		15.2		28.3		20.5	
	34.4	48.1	25.3	34.2	7.9	30.5	20.3	13.9	12.0	11.9	11.1	20.7	18.2	31.0	10.0	31.6
2．心を理解	47.9		35.8		41.8		35.0		34.3		43.9		45.3		30.8	
	51.1	42.3	34.3	39.5	50.0	37.3	34.4	36.1	32.0	35.7	50.0	37.9	27.3	50.0	20.0	42.1
3．厳しさ	40.8		43.1		28.6		34.0		29.9		45.5		41.5		51.3	
	43.3	36.5	46.5	34.2	28.9	28.8	37.5	27.8	36.0	26.2	55.6	31.0	45.5	40.5	50.0	52.6
4．密な交流	38.0		27.0		33.7		18.0		43.3		19.7		43.4		30.8	
	42.2	30.8	28.3	23.7	42.1	27.1	18.8	16.7	40.0	45.2	25.0	13.8	45.5	42.9	35.0	26.3
5．悩み相談	12.7		16.1		4.1		10.0		4.5		13.6		17.0		15.4	
	16.7	5.8	20.2	5.3	5.3	3.4	10.9	8.3	0.0	7.1	13.9	13.8	9.1	19.0	20.0	10.5
小計（子どもに関わる事柄）	178.8		149.7		129.6		115.0		123.9		137.9		175.5		148.8	
	187.7	163.5	154.6	136.9	134.2	127.1	121.9	102.8	120.0	126.1	155.6	117.2	145.6	184.4	135.0	163.1
6．専門的知識	21.1		38.0		22.4		22.0		10.4		30.3		11.3		28.2	
	18.9	25.0	36.4	42.1	23.7	22.0	17.2	30.6	4.0	14.3	25.0	34.5	0.0	14.3	25.0	31.6
7．授業の準備	12.7		13.9		12.2		14.0		7.5		16.7		9.4		10.3	
	13.3	11.5	13.1	15.8	10.5	13.6	15.6	11.1	4.0	9.5	16.7	17.2	9.1	9.5	15.0	5.3
8．授業の創意工夫	40.8		39.4		32.7		29.0		25.4		24.2		35.8		38.5	
	45.6	32.7	39.4	39.5	36.8	28.8	25.0	36.1	12.0	33.3	16.7	34.5	27.3	38.1	45.0	31.6
9．集団をまとめる	19.7		11.7		28.6		12.0		20.9		28.8		22.6		17.9	
	18.9	21.2	10.1	15.8	21.1	33.9	15.6	5.6	16.0	23.8	38.9	17.2	27.3	21.4	25.0	10.5
10．教科外指導	16.9		27.7		8.2		21.0		6.0		18.2		5.7		41.0	
	23.3	5.8	27.3	28.9	7.9	8.5	20.3	22.2	8.0	4.8	19.4	17.2	0.0	7.1	50.0	31.6
小計（実践に関わる事柄）	111.2		118.7		104.1		98.0		70.2		118.2		84.8		135.9	
	120.0	96.2	126.3	142.1	100.0	106.8	93.7	105.6	44.0	85.7	116.7	120.6	63.7	90.4	160.0	110.6
11．豊富な知識	26.8		30.7		13.3		17.0		6.0		21.2		5.7		7.7	
	27.8	25.0	29.3	34.2	10.5	13.6	15.6	19.4	8.0	4.8	22.2	20.7	9.1	4.8	5.0	10.5
12．仕事に誇り	33.1		34.3		19.4		26.0		10.4		24.2		17.0		17.9	
	28.9	40.4	34.3	34.2	28.9	13.6	26.6	25.0	8.0	11.9	25.0	24.1	9.1	19.0	30.0	5.3
13．常に情熱	48.6		46.0		44.9		41.0		40.3		43.9		52.8		64.1	
	45.6	53.8	41.4	57.9	52.6	40.7	39.1	44.4	28.0	47.6	44.4	41.4	27.3	59.5	60.0	68.4
14．誠実さ	35.9		39.4		32.7		22.0		19.4		19.7		32.1		15.4	
	35.6	36.5	36.4	47.4	23.7	39.0	23.4	19.4	16.0	21.4	13.9	27.6	27.3	33.3	20.0	10.5
15．精神的若さ	16.2		21.2		6.1		12.0		17.9		10.6		24.5		25.6	
	17.8	13.5	21.2	21.1	2.6	8.5	12.5	11.1	20.0	16.7	13.9	6.9	18.2	26.2	25.0	26.3
小計（生き方に関する事柄）	160.6		171.6		116.4		118.0		94.0		119.6		132.1		130.7	
	155.7	169.2	162.6	194.8	118.3	115.4	117.2	119.3	80.0	102.4	119.4	120.7	910	142.8	140.0	121.0
16．反面教師	0.7		5.1		13.3		5.0		16.4		7.8		13.2		12.8	
	0.0	1.9	4.0	7.9	5.3	16.9	6.3	2.8	12.0	19.0	0.0	17.2	18.2	11.9	10.0	15.8
17．その他	3.5		4.4		7.1		5.0		3.0		3.0		7.5		5.1	
	2.2	5.8	4.0	5.3	5.3	8.5	4.7	5.6	8.0	0.0	2.8	3.4	0.0	9.5	5.0	5.3

※第1-3GCの数値は第3回調査時（1994年）のもの、第4-6GC、第7-9GC、第10-11GCの数値は第5回調査時（2004年）のものである。
※※各GC層毎において、「影響を受けた教師」が「小学校」及び「中学校」であったと単独回答した者の人数である。

《図表14》教職に就く以前に読んだ本・見たり聞いたりした映画・ラジオ・テレビ番組の中で、職業として教職を選択したことに影響を及ぼしたもの（第１～９GCは1994調査結果、第10、11GCは、1994、2004調査結果）（３つまで自由記述されたものの内、上位５・６位までを表記、（ ）内は指摘件数、【 】内は総指摘件数）

	第１位	第２位	第３位	第４位	第５・６位	
第１GC【１８０】	壷井 栄（１８）『二十四の瞳』	夏目漱石（１１）『坊ちゃん』他	ルソー（８）『エミール』	島崎藤村（７）『破戒』他	無着成恭（６）『山びこ学校』	国分一太郎（５）『新しい綴方教室』
第２GC【１６２】	壷井 栄（３５）『二十四の瞳』	島崎藤村（１０）『破戒』他	夏目漱石（６）『坊ちゃん』他	無着成恭（４）『山びこ学校』	下村湖人（４）『次郎物語』	
第３GC【１８５】	壷井 栄（５５）『二十四の瞳』	夏目漱石（１０）『坊ちゃん』他	島崎藤村（９）『破戒』他	石川達三（８）『人間の壁』	下村湖人（８）『次郎物語』	斎藤喜博著作（７）
第４GC【１０８】	壷井 栄（３２）『二十四の瞳』	斎藤喜博（１１）『島小の女教師』他	夏目漱石（４）『坊ちゃん』他	石川達三（４）『人間の壁』	下村湖人（４）『次郎物語』	島崎藤村（３）『破戒』他
第５GC【９９】	壷井 栄（２１）『二十四の瞳』	石川達三（１０）『人間の壁』	無着成恭（５）『山びこ学校』	夏目漱石（４）『坊ちゃん』他	住井すえ（３）『橋のない川』	
第６GC【８２】	壷井 栄（２２）『二十四の瞳』	石川達三（４）『人間の壁』	夏目漱石（４）『坊ちゃん』他	新田次郎（４）『聖職の碑』		
第７GC【７９】	テレビ番組（１６）『３年Ｂ組金八先生』	テレビ番組（１２）『熱中時代』	灰谷健次郎著作（11）『兎の眼』他	壷井 栄（８）『二十四の瞳』	テレビ番組の青春ドラマ（６）	
第８GC【７５】	テレビ番組（２１）『３年Ｂ組金八先生』	テレビ番組（１２）『熱中時代』	灰谷健次郎著作（11）『兎の眼』他	壷井 栄（９）『二十四の瞳』		
第９GC【１０８】	テレビ番組（２１）『３年Ｂ組金八先生』	灰谷健次郎著作（21）『兎の眼』他	テレビ番組（１７）『熱中時代』	壷井 栄（１１）『二十四の瞳』		
第１０GC【６１】	灰谷健次郎著作（16）『兎の眼』他	映画『いまを生きる』（６）	テレビ番組（４）『教師びんびん物語』	壷井 栄（４）『二十四の瞳』	映画『陽のあたる教室』（４）	
第１１GC【４０】	灰谷健次郎著作（12）『兎の眼』他	テレビ番組（１１）『３年Ｂ組金八先生』	壷井 栄（５）『二十四の瞳』	大村はま著作（４）『教えるということ』他	テレビ番組（４）『ＧＴＯ』	

「16. 反面教師」や「17. その他」を除く15項目全体を通して指摘率をみていくと、「２．心を理解」「３．厳しさ」「８．授業の創意工夫」「13. 常に情熱」といった項目が各GCを問わず相対的に指摘率が高いのに対して、「５．悩み相談」「７．授業の準備」といった項目が低い。また、他のGCグループと比較して第10-11GCをみると、「11. 豊富な知識」の指摘率は低く、逆に「15. 精神的な若さ」の指摘率は高いことも特徴的である。影響を受けた教師の学校段階（小中）別に着目すると、「３．厳しさ」「６．専門的知識」「10. 教科外指導」といった項目で中学校教師から、逆に「４．密な交流」項目で小学校教師からの影響が、それぞれ相対的に高い傾向にあり、それぞれの学校段階の教育活動の特徴を反映しているといえよう（小中別や男女別の考察においては、それぞれの回答者数が少なくなるため指摘率の数値も不安定なものとなってしまっているという制約を前提にしていることをお断りしておきたい）。

（２）情報源

入職以前の段階で「理想的な教職イメージ」を形成する情報源として、被教育体験以外に重要なものとして「教職に就く以前に読んだ本・雑誌、見たり聞いたりした映画・ラジオ・テレビ番組」がある。調査では、「（それらの中で）職業として教職を選択したことに影響を及ぼしたと思われるもの」を３つ以内、自由記述で回答してもらった。その結果を整理したものが《図表14》である。GCが下がってくる（若い年齢段階世代）にしたがって指摘件数（【 】や（ ）の中に数字で明記）が少なくなっている、それは実際に影響を及ぼしたものが少なくなってきているのか、それともたんに回答者数が少なくなってきたことだけなのかは即断できないという制約のあることを前提として、以下、考察していこう。

まずGC間の相違に着目すると、それぞれの第１位に上がっているものの変化に大きな特徴がある。すなわち、第１～６GC（2004年調査時点で70歳代前半～40歳代後半の退職及び現職教師層）においては壷井栄『二十四の瞳』であったのが、第７～９GC（同上時点で40歳代前半～30歳代）ではテレビ番

組『3年B組金八先生』が登場する。そして第10〜11 GC（同上時点で20歳代）になると灰谷健次郎『兎の眼』他と変化しているのである。

壷井栄『二十四の瞳』は、第1 GCが大学卒業を迎える頃、1952年キリスト教関係の雑誌『ニュー・エイジ』で連載が始まり、その後単行本となり、1954年には映画化もされた（その後映画・テレビドラマとしてリメイク版も作製もされた）。昭和初期、島の分教場を舞台として、師範学校を卒業したての女教師と12人の小学校1年生の生活と交流を描いた同作品は、平和な島と彼（女）らまでも飲み込んでいく戦争という時代も合わせて描き、教職の理想像を与え続けてきているといえよう。

その『二十四の瞳』に替わって第7 GCから登場しているのがテレビドラマ『金八先生』や『熱中時代』である。中学校と小学校を舞台としているが、いずれも個性的で熱血的な男性教師を主人公として、子どもたちが引き起こ事件を中心テーマにその中での教師と子どもたちとの交流を描いているものである。とりわけ『金八先生』は、最初のシリーズが始まったのが1979年10月であり、第7 GCは高校時代に視聴することになる。その後、校内暴力、無気力、いじめ、引きこもり、性同一性障害、知的発達障害などの時代を反映する教育問題を中心テーマとして取り上げながら、2004年10月の時点で7回もシリーズ化され放映され続け、第7 GC以降も小中高校時代に視聴してきている。さまざまな教育問題を背景としながら子どもたちが引き起こす事件に戸惑い悩みながらも、正面から子どもたちと向き合い子どもたちを信頼し続け、問題の解決に向けて情熱的に活動する教師の姿に、1970〜80年代前半の受験競争と学校の“荒れ”状況、それに続く80年代後半の管理主義教育体制の下で学校生活を送ることになった第7-9 GCに、被教育体験としての暗いイメージの学校及び教師像とは異なる一種の救いとしての理想像を与えてきたのではないかと思われる。

ドラマ『金八先生』は、上記したように取り扱う中心テーマが社会動向も反映して次第に深刻な教育問題となっていく。それとともに、第10-11 GCにおいては、子どもや教師を題材とした灰谷健次郎の一連の作品が登場してきている。『兎の眼』『天の瞳』『太陽の子』などがその代表作品であるが、なかでも『兎の眼』（1974年発表）は、新卒の女教師が学校では一言も口をきかない一人の子どもと苦しみながらも向き合い格闘し、同僚教師や周囲の人たちに助けられながら成長していく物語であり、若い世代の教師たちに共感をもたらしてきている。

第2位以下にあげられているものを見渡してみても、各GC毎の世代間の相違といったものがうかがわれる。第1-2 GCにみられる無着成恭『山びこ学校』（1951年）は戦後新教育の中での生活綴方教育の復活を象徴しているものであり、第3-6 GCにみられる石川達三『人間の壁』（1958年）は1950年代後半教育の国家統制の強化や勤評反対闘争などの激しい組合運動の時代を背景として小学校女教師の成長を描いている点で時代を象徴している。また第4 GCにおい登場している斎藤喜博は群馬県島小学校（1952-63年校長）を舞台として教育実践の創造に多くの業績を残した実践家であり、現在の50〜60歳世代に大きな影響を及ぼしてきている。

理想とする教師像や教職イメージは、実際に教職に就く以前の段階からすでに意識的無意識的に形成されてくる。その代表的なものが、被教育体験の中で出会った恩師の態度や教育実践であり、本やテレビや映画等から得る教師や子どもたちの姿である。そしてそれは、むろん個人毎多様なものなのであるが、同一GC内成員間で共有されながら、また各GC間で異有されながら、それぞれの教師の入職後の生活と実践のあり方に影響を及ぼしていくものなのである。

【注記】

（1） 拙稿「教師の力量形成に関する調査研究（V）：第5回目（2004）調査結果の基礎分析報告」（『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第56号、2006年3月）、及び拙稿「同（V-2）：第5回目（2004）調査結果の基礎分析報告：教職観と教職イメージ」（『静岡大学教育実践総合センター紀要』第12号、2006年3月）

※今回の調査は、科学研究費補助金交付研究課題「ライフコースアプローチに基づく教師の発達と力量形成に関する継続調査研究」（課題番号：16530498、平成16～18年度）の一部を成すものである。